PDF Compressor Free Version

ふるさとの歴史 こぼれ話 Vol.7

柳ケ瀬の誕生（明治・大正編）

―「上加納村柳瀬」から繁華街「柳ケ瀬」誕生まで―

柳ケ瀬といえば、岐阜を代表する繁華街ですが、昔からそうだったわけではありません。厚見郡上加納村の一画で、蓮池・沼地などが広がる低湿地でした。ここからどのようにして、繁華街「柳ケ瀬」は生まれたのでしょうか？

1．柳ケ瀬の夜明け

江戸時代～明治中期

江戸時代から明治中頃にかけては、長良橋から伊奈波付近（旧岐阜町）が繁栄していました。商業流通は長良川の水運を利用して行われ、湊町・元浜町付近で、物資の集散が盛んでした。芝居など娯楽は、伊奈波神社の周辺に集中し、盛り場として賑わっていました。

明治7年（1874）今泉村（現司町）に岐阜県庁が設置され、明治20年（1887）鉄道の駅「加納停車場」の敷設、明治21年（1888）金津遊郭開設など、それらが要因となり、次第に中心部が南進し始めました。加納停車場は1年後に現在の神田町8丁目に移転。…翌22年（1889）7月東海道線全通と同時に「岐阜市」が誕生することになっていたので、「岐阜駅」と改称されました。

そして旧岐阜町と岐阜駅を結ぶ八間道（現長良橋通り）が開かれました。またその頃八間道から遊郭への道（現柳ケ瀬通り）も誕生しました。…県庁と岐阜駅の中間に位置し、新開地で土地の値段が安かったことがその後の繁栄の要因となりました。こうして明治の中頃に、柳ケ瀬は夜明けを迎えたのです。

遊郭までの道は、蓮池や田畑のすぐそばを通っていました。北側は弥八の墓場越しに、岐阜警察署（今沢町）や岐阜監獄（美江寺町）がよく見えたといいます。

開設当初の金津遊郭は押すな押すなの大景気で、遊客の往来が盛んでした。しかし店が立ち並んでいたわけではありません。

近くの八間道では少しずつ人出が増え、夏の夜は、甘酒、団子、高麗キビ焼き、古道具屋などの露店が並び活気付いていきました。また美殿町（現・日タク営業所の東隣）には泉座、柳ケ瀬1丁目（現・中日ビル）には旭座ができ、芝居が人気を集めるようになりました。

「明治24年・岐阜市・上加納村のようす」
（国土地理院地図をもとに作成）

2．2つの博覧会興行・盛り場へ

大正期Ⅰ

明治44年（1911）柳ケ瀬駅と美濃町間、岐阜駅と今小町間に電車が開通することになり、八間道の夜店が禁止となりました。それらの店は柳ケ瀬に引っ越してきました。

夏には土佐犬の闘犬、子ども相撲、ろくろ首の見世物、露天芝居が行われ、秋になると菊人形が始まりました。八間道の浅野「菊花園」などが、菊人形展を開催しました。

大正1年（1912）8月、県内初の活動写真（映画）の常設館「電気館」が八間道にできました。弁士のついた無声映画でしたが、映画を見た市民は口々に「どえらいこっちゃ、写真が動いとる」と驚きました。

柳ケ瀬電停前の菊花園店頭

大正4年（1915）岐阜市は岐阜県物産館、柳ケ瀬、岐阜公園の3箇所で「御大典記念勧業共進会」を開催。

従来、柳ケ瀬は郊外線「柳ケ瀬駅」と「金津」を結ぶ渡り廊下のような存在でしたが、この「共進会」は柳ケ瀬自体の存在を見せつけた初めてのイベントになりました。そして、この会場跡地が、後の柳ケ瀬繁栄の中核となっていくのです。

大正8年（1919）9月、岐阜市制30周年記念「内国勧業博覧会」が再び柳ケ瀬で開催されました。人出は約15万3千人あり大成功でした。

御大典記念勧業共進会

3．呉服店と映画館の進出

大正期Ⅱ

柳ケ瀬の将来性に目をつけたのは呉服店でした。着物がファッションの時代、呉服店が進出しても当然のことでした。一番最初の店は「美の繁呉服店」で、明治29年（1898）でした。

大正に入って「たなはし呉服店」「野村古着店」が、大正4年（1915）には「江戸っ子」、さらに大正11年（1922）には「山田呉服店」「万力呉服店」が移転開業しました。翌年にも「山本呉服店」「百貨堂」が開業し、その他にも「百助小間物店」「丸金料理店」らが柳ケ瀬に移転してきました。

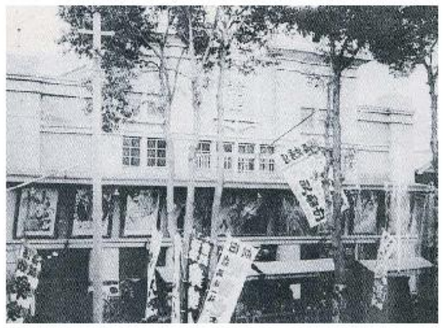
大正10年（1921）店に集まる大八車が交通を妨害して近所に迷惑をかけるということで「大万商店」が神田町への移転を決めました。その際、400燭の裸電球20個を柳ケ瀬通りに寄贈しました。その結果1丁目から4丁目が点灯し、露店が増えて賑やかになり、人出も増えました。街頭照明の草分けとなりました。

柳ケ瀬で競合する呉服店との差別化を考えた「万力」が導入したのは、百貨店方式でした。来店客は店先の下足番に履物を預け、店内へ上がりました。「山本呉服店」も、木造3階建ての本格的百貨店として大いに注目されましたが、開店してみると買う人よりも見物人のほうが多かったようです。柳ケ瀬3・4丁目の店主達が一つの建物の中に各自の品を販売した「百貨堂」も人気でした。

こういった小百貨店は、従来「物が高い」「掛け値がある」といわれた商売から、「正札つきの廉売へ」と変化し、ますます繁昌をみたという結果をもたらしました。

数々の呉服店の進出はお互いの競争を激化させ、各店趣向を凝らした宣伝が功を奏し、客が客を呼ぶ商店街の礎となりました。

大正中頃になると活動写真（映画）がブームとなりました。大正6年（1917）芝居小屋の美殿座が日活の常設館となり、大正10年（1921）衆楽館が開業。岐阜劇場（旧明治座）、金華劇場なども次々とオープンし、柳ケ瀬は映画・芝居興行の中心、大衆娯楽のメッカとなりました。


大正10年の衆楽館

大正末期には、買い物客の他、活動写真を見る人、様々な遊戯場に遊びに来る人など、柳ケ瀬は大勢の人々で賑わうようになりました。

大正末期の柳ケ瀬通り

○この文章は、「岐阜日日新聞・やながせ特集（昭和50年）」「岐阜日日新聞・岐阜市120年記念（平成21年）」「柳ケ瀬百年誌」「ふるさと岐阜の物語・大正編」「岐阜市史・通史編・近代」などをもとに、林再寿と後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア
「お話・岐阜の歴史サークル」
代表　後藤　征夫
http://book.geocities.jp/gifurekisi/rekisitop.htm
TEL 058-231-6726